

No.3122

東南アジアの博物館と人材教育：考古学の視点から

岡山理科大学教育推進機構学芸員教育センター教授（センター長）

徳澤 啓一

当初、2020年岡山理科大学で予定していた「全国大学博物館学講座岡山大会」と前後して、『東南アジアの博物館と人材教育』（主催：岡山理科大学）を開催するはずであった。COVID-19感染症禍によって、3年間の延期を余儀なくされたものの、2022年12月4日、「東南アジア考古学会大会」として、『東南アジアの博物館と人材教育：考古学の視点から』を開催することにした。

大会では、貴財団の国際学術交流助成により、2名の外国人研究者を招聘し、午前中、2名の招待講演を実施した。まず、フィリピン国立博物館のMary Jane Louise A. BOLUNIA氏から「フィールドワーカーからキュレーターまで：フィリピン国立博物館考古学部で働く」、次に、ベトナム国家文化遺産審議会委員・元南部社会科学学院副院長のBUI Chi Hoang氏から「ベトナムの博物館：制度と体系、考古学との研究連携」という演題で、現地における博物館制度や専門人材の役割とその育成に関する実情、課題を紹介いただいた。

午後は、2020年時点の日本人発表者の予稿をもとに、『アジアの博物館と人材教育—東南アジアと日中韓の現状と展望—』（山形眞理子・徳澤啓一編／雄山閣／2022年3月発行）を出版していたことから、この中から、まず、徳澤により、「日本型キュレーターの目指す方向性と課題：東南アジアと日本の博物館の比較をふまえて」として、わが国の大学における博物館学芸員養成課程の現状を説明するとともに、東南アジア各国の博物館と人材教育の状況を概観した。次に、丸井雅子氏（上智大学）による「カンボジアの博物館人材養成と大学カリキュラム」、白石華子氏（京都大学）による「タイの博物館と学芸員—国立博物館の学芸員制度と大学における人材育成—」、坂井隆氏（元・台湾大学）による「巨大博物館の影響力：インドネシアと台湾の比較」として、各国の事情を解説いただき、ベトナム、カンボジア、タイ、フィリピン、インドネシアを主な対象として、山形眞理子（立教大学）の司会のもと、討論・意見交換等を行った。